

# 3. 十勝平野が「陸地」になったころ

## 最初の「十勝川」ができる

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

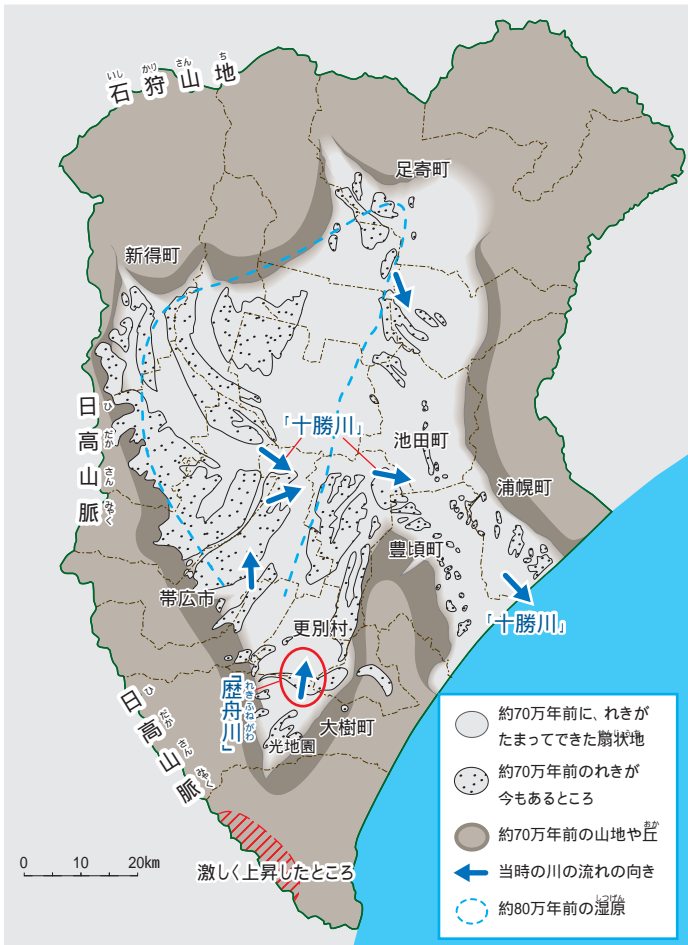
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



約70万年前、日高山脈や石狩山地などから流されてきた石(れき)が十勝平野をうめつくして扇状地をつくり、最初の「十勝川」ができた。当時の「歴舟川」は北に向かい「十勝川」に合流していた。(『地研専報22十勝平野』より、改変)

およそ70万年前になると、日高山脈の南部が、再び激しく上昇をはじめました。

空気や雨風、暑さ・寒さにさらされた岩はくずれやすくなり、こわれ、やがて「れき(岩のかけら・石)」になります。

上昇した山脈を流れ下る水は川となって、これらのれきを下流に流し出します。

日高山脈は、くずれても上昇を続け、長い間、れきを下流に出し続けました。

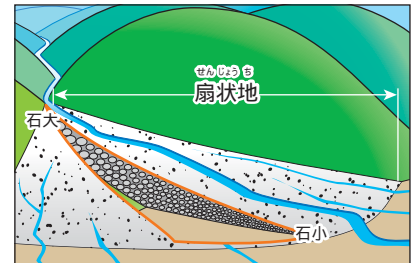
同じころ十勝北部にある山地も上昇し、ここからもたくさんのれきが十勝平野に流れこみました。

### 湿原が陸になる

川の流れが速い時には、大きなれきでも流されます。かたむきが急な山の中から平地に流れてきた川は、流れがおそくなります。そのため大きなれきから流されなくなり、たまっていきます。

川は流れを変えながら、れきを平野に広くためていきました(こうしてできた地形を「扇状地」といいます)。

十勝中央部にあった湿原( p40 )はうめ立てられ、陸へとすがたを変えていきました。



### 「十勝川」の誕生

湿原へれきを運んだ川の水は、さらにその先、今の池田・豊頃へ流れ出すようになり、太平洋に流れこみました。

日高山脈北部や石狩山地からの川が、直接太平洋とつながり、ついに、最初の「十勝川」が生まれたのです。

また、今では大樹町の中だけを流れる「歴舟川」は、このころ北に向かって流れていました。今の猿別川や札内川のように流れて、「十勝川」に合流していたのです。

これらの川は、日高山脈のふもとから十勝川の河口の近くまでれきを流し、ためていきました。



今の十勝川。昔は、まるで別のところを流れることもあったが、十勝中央部を通り、十勝太(浦幌町)～美津(豊頃町)周辺へ流れ出るのは変わらない。

1 70万年前(70まんねんまえ): 光地園れき層や美蔓れき層などの年代を示す直接的な証拠はないが、中期更新世(78万~13万年前)初期に対比してある「十勝の自然を歩く」巻末年表を参考にした。これら古いれき層の年代については検討が進められていて、

今後変わる可能性がある。

2 れき(礫): 粒径(つぶの直径)が2mm以上の岩のかけら。2mmより小さいものは砂。れきは、山体の岩盤(がんぱん)がくだけることできる。くだける理由としては、岩

# もろい石 = クサレれきを探そう ... 光地園れき層

地層の観察は、土地の所有者に、許可をもらってからおこなひましょう。

70万年前に、日高山脈から流されてきて十勝南部一帯をうめ立てたれきの地層を「光地園れき層」といいます（北の山地からのれきは「美蔓れき層」）。

このれき層は、大樹町光地園のあたりでおよそ90mの厚さがあります。

光地園れき層は、たまってから長い年月がたっているため、空気中の酸素、風や雨、あるいは温度などによってもろくなって（風化して）いるれきをふくんでいます。ハンマーでたたくと、すぐにくだけてしまうこのれきは、「クサレれき」といわれています。

光地園れき層は、戸蔦別川の戸蔦大橋東側（右岸側）のがけや、札内川の大正橋上流西側（左岸側）のがけ、あるいは、幕別町の途別市街の西にある丘や、稲土別近隣センターの裏にある丘の高いところなどで見られます（平成18年現在）。

ただし、工事中の場所や急斜面など、危険なところには近づかないように。



光地園れき層が見られた土取り場のがけ。（中札内村西戸蔦）



クサレれき。（写真：藤山広武氏） たたとく、かんたんにくだける。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

## もう少し細かいこと

### 今も続く日高山脈の上昇

大地の動きは、大昔の話だと思っいていませんか？ 私たちが生きている「今」でも、大地は動き続けているのです。

例えば、日高山脈は今も上昇を続けているようです。上昇速度は、1年に1mmくらいだといわれています。

ただ、同時に少しずつくずれたり、けずられたりもしていくので、山の高さが高くなっていくとは限りません。

### 平野全部が石の河原になったわけではない

光地園れき層のれきは、十勝平野を広くおおいました。とはいっても、1日とか1年とかの間に起きたことではなく、100年でもなく、何千年も何万年もの年月をかけてのできごとです。

また、十勝平野すべてが石の河原になったわけではありません。

川はその時その時で、流れる場所を変えています。

その流れや河原以外のところには、土がたまり、草木が生えることもあったでしょう。



今の札内川（清柳大橋近く）。石の河原でも、水をかぶらないところには植物が生える。

### 大昔の川の流れを知る方法

何十万年も前に、川がどちら向きに流れていたのかは、どうやってわかるのでしょうか？

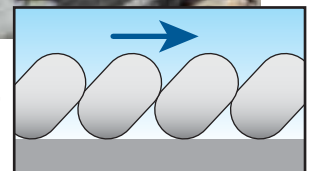
今流れている川、とくに上流～中流部の流れが速い川で、河原の石をよく見てください。将棋だおしのあとのように、上流側の石が下流側の石に重なっていることが、多く見られます。これを「瓦がさね配列（インプリケーション）」といいます。

れきの地層を調べる時に、こうした石の重なり具合を確かめることで、昔の川が流れていた方向を知ることができるのです。

この調べ方は、火星の調査でも利用されています。火星の石にも、この「将棋だおし」の形が見られました。今では液体の水が見られない火星にも、昔は川があったのです。



札内川中流（帯広市・第二大川橋上流）。河原の石は、上流の石が下流の石に重なるようになることが多い。



盤にある小さなすき間の水が、凍結・融解（とうけつ・ゆうかい）をくり返すことでひび割れを広げることなどがあり、また、山の上昇は、岩盤がくだけやすい状態をつくる。  
3 扇状地（せんじょうち）：河川が山地から平野や盆地（ぼんち）に移る所などに見ら

れる、土砂（どしゃ）などが山側を頂点として扇状（おうぎじょう）にたまり積もった地形。  
4 右岸・左岸（うがん・さがん）：川の下流に向かって右側を右岸、左側を左岸という。